慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	池田, 幸弘(Ikeda, Yukihiro)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2012
Jtitle	Booklet Vol.20, (2012.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000020-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

はじめに

アートセンターが年１回公刊しているブックレット。基本的には特集形式で、毎回編集の任にあたる所員が集まって、ああでもないこうでもないと特集のテーマを決めている。現に話題になっている、問題になっていることを後追いするよりは、なんらかの意味で先んじている主題が歓迎されるが、これがなかなかに難しい。

今回のテーマの「ゴジラとアトム」だが、この主題が定まるにあたっては、いま考えるにどうも編集にかかわる者たちのノスタルジアが関与していたことは否定できない。はっきりいって、私は最年長だが、ゴジラにせよアトムにせよウルトラシリーズにせよ、端的にめちゃくちゃ面白かった。理屈などを当時考えていた形跡はまったくない。

いま１つが、解決に向かっているのか深刻化しているのかも定かではない、3.11 である。震災と原発。後者の被害の甚大さはここで改めて述べるまでもない。地震発生時に筆者はたまたまオーストリアにいたが、現地でのテレビ報道では最初から中心は福島問題であった。当日の日本での報道について私は知らないので比較はできないが、日本人ほど地震というものになじみがないかれらにとっては最大の関心事は原発の問題であった。そして、現に原発問題は欧州の国内政治に大きな影響をあたえた。今日、原発事故に伴う放射能の問題の解決のためには、自然科学の領域だけではなく、社会科学、人文科学あらゆる分野の知恵を結集することが求められている。他方、私どもの育った高度成長期は、科学技術の発展や応用の時代でもあった。そのなかに科学の子たる原発もあった。このような時代精神が、何らかの形でサブカルチャである漫画やアニメに影響を与えていないわけはない。

今回、このような主題をひっさげて特集を編んだのはおおむね以上のようなことからである。企画全体が首尾よく運んだかどうかは読者に判断していただくほかないが、3.11 以降のさまざまな言説のなかで、一石を投じることはできたのではないかと自負している。以下、御寄稿いただいた論考をみていこう。

冒頭の加藤典洋氏の論考は、通常陽の存在として描かれているアトムと陰のイメージで語られているゴジラが、実は位相的に同型であることを主張し、そこに戦後日本において隠蔽されている重要な論点を見る。加藤氏はゴジラが実は第二次世界大戦において不幸にして命を失った戦死者を表現しているのだと言う。ゴジラは他からやってくるのではなく、回帰する（revenir）するのだと。加藤の主張にたいする賛否はともかくとして、きわめて重い問題提起を含

んだ論考だといいうる。加藤氏の前著は、以下の論考でもしばしば考察の対象となっており、今回の論集を理解するための１つの重要な鍵ともなっている。

次に配された萩原能久氏の論考はクロスする論点を多く含みつつ、肝心なところで加藤氏との見解の違いを見せている。萩原氏は、ゴジラのたびかさなる日本上陸は単純に定番ものにつきものの繰り返しにすぎないと言う。そして、小田実にふれつつ、ゴジラは英霊だけではなく、戦争の犠牲になった人々すべての「残留思念の集合体」だというのである。ゴジラ解釈にあたっての、加藤・萩原両氏の懸隔ははっきりとしている。おふたりの戦後解釈の違いがゴジラ理解に影を落としている。

巽孝之氏の論考は、やや異なった角度からゴジラを問題にしている。とりわけ、塾の芸文学会シンポジウムでの牛場暁夫氏の指摘を受けて、ゴジラと日本神話あるいは神道との関係を指摘しているのは興味深い。そして、ゴジラもアトムも日本の高度成長期の最大のアイドルであったと締めくくっている。

これらの諸論考にたいし、アトムを主題的に扱ったのが、吉村和真氏である。ここでは、吉村氏は what he（she）really said の問いに挑もうとする。すなわち、原作者である手塚の意図に迫ろうとする。となれば、アトムが原子でありまた科学の子である以上、当然 3.11 との関係に言及せざるをえない。氏は、原作者である手塚は明確に反原発の立場であり、その点でアトムの一般的イメージとの格差に悩んでいたという。さらに、論考は原型としての「アトム大使」にまで分析を進めている。

氷川竜介氏の論考はそれ自体宮崎駿作品にたいする良きイントロダクションになっており、『未来少年コナン』と石油ショック後の状況との関係など興味深い論点を含んでいる。筆者には論考の終わり近くで指摘されている、アニメーションという道具立てが元来含んでいる矛盾が印象的であった。3.11 とこの解決の困難さを想起させる文章で論考は閉じられる。

粂川麻里生氏は、ゴジラ、モスラ、ウルトラマンと考察を進める。ゴジラ論については、前記の加藤氏の所説がここでも詳細に検討されている。粂川氏の論考がほとんど祈りにも似たメッセージで閉じられるのはまことに印象的でもあり、読む者の同感を誘って止まない。

最後になったが、ご多忙のところご論考をお寄せいただいた方々に心から感謝したい。今回の企画が、さまざまな形でサブカルチャを根底的に規定している出来事や思想とそれらとの関連性や、サブカルチャ自体の新たな切り口を明らかにすることに繋がれば幸いである。そろそろ、3.11 から１年たつことを改めて想起しつつ。

慶應義塾大学アート・センター所員／編集委員　池田幸弘